

「わざわざいだ、パリサイ人」

ルカの福音書 11:37~44

はじめに

今日の内容は、イエシュアがパリサイ人たちの教えや行いを激しく批判、非難されるという出来事です。こういう箇所を読むとついつい誰かを批判し、裁きたくなったり、あるいは自分で自分にダメ出しをしたりしてしまいます。しかしそうならないように、このような箇所からただ「神の国」だけを求めて、神のご計画の完成にのみ目をとめて読み解き、語ってまいりたいと思います。どうかこれを聞かれる一人ひとりにも主がそのように導いてくださいますように。

1. お願い

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:37 イエスが話し終わられると、一人のパリサイ人が、自分の家で食事をしていただきたい、とお願いした。そこでイエスは家に入って、食卓に着かれた。

イエシュアの御言葉を聞いていた一人のパリサイ人がイエシュアに「お願いした」とあります。ここに使われているヘブル語はバーカシュ(צָרַף)といい、本来は「責任を負う、責任を取らせる」という意味の言葉です。

創世記【新改訳 2017】

31:39 野獣にかみ裂かれたものは、あなたのもとへ持って行かずに、私が負担しました。それなのに、あなたは昼盗まれたものや夜盗まれたものについてまでも、私に責任を負わせました。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブが伯父のラバンに言ったものです。ヤコブはラバンの家畜の群れを任されていて、それは「盗まれたもの」失われたものに対しても「責任を負う」ということであり、ここに聖書で最初のバーカシュが使われています。この意味はイエシュアに与えられた使命、遣わされた目的を指し示しています。なぜならこう言われているからです。

マタイの福音書【新改訳 2017】

15:24 イエスは答えられた。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」

ルカの福音書【新改訳 2017】

19:10 人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。

一見パリサイ人がイエシュアを食事に招いたという、単なる状況説明のように見受けられますが、ここに奥義が、神のご計画の「型」があります。すなわちイエシュアはパリサイ人に象徴されるような「イスラエルの家の失われた羊たち」に対して、これを「捜して救う」という「責任を負」っておられるのです。

そしてイエシュアは「食卓に着かれた」食卓を囲まれたともあります。ここに使われているサーヴァブ(סֵרָב)は本来、「一つの川が全土を巡って流れる(創世記 2:11)」という意味で、この言葉もまた「失われた者を捜して救うために」地を歩き巡り、歩き回られるイエシュアの姿を指し示しています。このような事実は、「神の国」を宣べ伝え、十字架の死と復活のために来られたイエシュアの初臨においても見受けられましたが、世の終わりにこそその究極的な成就が成されます。それはこう預言されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:1 その後、私は四人の御使いを見た。彼らは地の四隅に立ち、地の四方の風をしっかりと押さえて、地にも海にもどんな木にも吹きつけないようにしていた。

7:2 また私は、もう一人の御使いが、日の昇る方から、生ける神の印を持って上って来るのを見た。彼は、地にも海にも害を加えることを許された四人の御使いたちに、大声で叫んだ。

7:3 「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を加えてはいけぬ。」

7:4 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。

終わりの日、主は御使いたちに命じて「地の四方」を歩き巡らせ、「十四万四千人」の「イスラエルの子らのあらゆる部族の者」を捜し出し、彼らの「額に印を押し」これを選び出し、救い出すために集めることが預言されています。イエシュアの言われた「イスラエルの家の失われた羊たち」を「失われた者を捜して救う」という御言葉は「イスラエルの残りの者(ミカ書 2:12)」とも呼ばれる彼らの上に成就するのです。こう預言されているとおりです。

ミカ書【新改訳 2017】

2:12 ヤコブよ。わたしは、あなたを必ずみな集め、イスラエルの残りの者を必ず呼び集める。わたしは彼らを、囲いの中の羊のように、牧場の中の群れのように、一つに集める。こうして、人々のざわめきが起ころ。

2. きよめの洗い

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:38 そのパリサイ人は、イエスが食事の前に、まずきよめの洗いをなさないのを見て驚いた。

次に、パリサイ人はイエシュアが「きよめの洗いをなさないのを」見たとあります。これは一般的に言われているような「食事の前には手を洗いましょう」という衛生的観点によるものではなく、当時のユダヤ人たちの宗教的な儀式を指します。多くのクリスチャンが行っている習慣化、義務化した食前の祈りがこれに相当します。イエシュアはそれをなされなかったとありますが、ここにも先ほどの奥義につなが

る神のご計画が秘められています。ここに使われているナータル(נָטַר)という言葉の初出箇所は以下のものです。

Ⅱサムエル記【新改訳 2017】

24:12 「行ってダビデに告げよ。『主はこう言われる。わたしはあなたに三つのことを負わせる。そのうちの一つを選べ。わたしはあなたに対してそれを行う。』」

24:13 ガドはダビデのもとに行き、彼に告げた。「七年間の飢饉が、あなたの国に来るのがよいか。三か月間、あなたが敵の前を逃げ、敵があなたを追うのがよいか。三日間、あなたの国に疫病があるのがよいか。今、よく考えて、私を遣わされた方に何と答えたらよいかを決めなさい。」

これはイスラエルの王ダビデがサタンにそそのかされて（Ⅱ歴 21:1）罪を犯した時に主が語られたものです。主は彼に対し三つの災いから一つを「負わせる」と提示され、ここに聖書で最初のナータルがあります。これにより実際にこの時七万人のイスラエルの民が疫病で死にました。このようにナータルとは本来、主がイスラエルに下される災いを指し示す言葉なのです。つまり「きよめの洗いをなさない」というイエシュアの行為には、ご自身がイスラエルに災いをもたらされる御方ではないということ、むしろその災い、苦難の時を終わらせ、彼らを救い出される御方であることをここに指し示されたのです。それがきよめの儀式、ナータルをされなかったイエシュアの姿に秘められた奥義、神のご計画です。

そしてこれを見たパリサイ人は「驚いた」とあります。これを意味するヘブル語ターマツハ(תַּמְחָה)の初出箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

43:33 彼らはヨセフの前で、年長者は年長の席に、年下の者は年下の席に座らされたので、一同は互いに驚き合った。

これはエジプトの宰相となったヨセフの前にその兄弟たちすなわちイスラエルの十二部族の長たちが「年長者」から「年下」にいたるまで、すなわちすべて一人も欠けることなく集められたという場面です。ここに「驚き合った」と訳された聖書で最初のターマツハがあります。この箇所はやがて終わりの日に「ヨセフの子と呼ばれた（ヨハネ 1:45）」イエシュアの御前にイスラエルの十二部族

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:5 ユダ族から一万二千人が印を押され、ルベン族から一万二千人、ガド族から一万二千人、

7:6 アシエル族から一万二千人、ナフタリ族から一万二千人、マナセ族から一万二千人、

7:7 シメオン族から一万二千人、レビ族から一万二千人、イッサカル族から一万二千人、

7:8 ゼブルン族から一万二千人、ヨセフ族から一万二千人、ベニヤミン族から一万二千人が印を押されていた。

と預言されている者たちがみな集められることを指し示した神のご計画の「型」なのです。ですからパリサイ人のこの驚き、ターマツハは一見彼のイエシュアを非難するような態度であっても、イエシュアの行いによって引き起こされた神のご計画を指し示す預言的な行いであったのです。

ちなみにパリサイ(פָּרִישִׁי)という名には「軍馬、騎兵」を意味するパーラーシュ(פָּרָשִׁי)という言葉が隠されています。この初出箇所にもぜひ注目していただきたいです。

創世記【新改訳 2017】

50:8 ヨセフの家族全員、彼の兄弟たちとその一族が上って行った。

50:9 また、戦車と騎兵も彼とともに上って行ったので、その一団は非常に大きなものであった。

これはヤコブの子ヨセフとその兄弟たちすなわちイスラエルの十二部族の長たちが彼らの故郷であり、主がアブラハムとその子孫に与えられたカナン之地に帰って行く様子を記したものです。ここに聖書で最初のパーラーシュ「騎兵」があり、これによって「その一団は非常に大きなものであった」と記されています。この記述もまた終わりの日の「型」です。すなわちヨセフの子と呼ばれた御方、イエシュアによって、地上再臨されたメシアであるこの御方に率いられてイスラエルの十二部族は非常に大きな群れとなって彼らの地に帰って行くという神のご計画の「型」がここには表されており、このパーラーシュに結びつくパリサイというこの名がここに使われていることは決して無意味なことでも偶然などでもなく、すべては神のご計画の奥義であることをぜひ知っていただきたいのです。

3. 内にあるものを施す

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:39 すると、主は彼に言われた。「なるほど、あなたがたパリサイ人は、杯や皿の外側はきよめるが、その内側は強欲と邪悪で満ちています。

11:40 愚かな者たち。外側を造られた方は、内側も造られたではありませんか。

11:41 とにかく、内にあるものを施しに用いなさい。そうすれば、見よ、あなたがたにとって、すべてがきよいものとなります。

ここで注目すべきなのは、外見ばかりを取り繕う偽善者ではありません。それはあなた自身でもなければどこかの教会でも教団でも、このパリサイ人のようなユダヤ教徒でもありません。イエシュアが「見よ」と言っておられるものを見てください。それは「内にあるものを施しに用い…すべてがきよいものとな」という神の御業です。主はご自分の選びの民を「すべてがきよいものと」することがおできになる御方であり、事実、必ずそれを成されます。では「内にあるものを施し」とは一体どういう意味なのでしょう。これはヘブル語の直訳では「義（の光）を受け取り、また与えなさい」となります。この「義」のことをツエダーカー(צְדָקָה)と言い、初出箇所は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

15:1 これらの出来事後、主のことばが幻のうちにアブラムに臨んだ。「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」

15:5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」

15:6 アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。

主はイスラエルの父祖アブラムに「天を見上げ…星を数えなさい」と言われ「あなたの子孫は、このようになる。」と言われました。彼はこれを「信じ…それが彼の義と認められた」とありますから、この「義」とは本来、アブラムの子孫であるイスラエルの民が「星」のようにおびたしく増え、そして地上を照らすような偉大な存在となる、という神のご計画を指し示すものであることがわかります。今日、この事実、真実を信じて受け入れ、宣べ伝える働きを担っているのが私たち教会なのですが、教会は今や世の価値観に呑み込まれ、日常生活に忙殺され、さらには人間中心の聖書解釈がはびこり、ほとんどその機能を失っています。これはまるで当時のパリサイ人たちのリプレイ、繰り返しそのものです。しかし終わりの日に起こされるイスラエルの残りの者は決してそのようではないと預言されています。主は彼らに特別な「神の印」を与え、それによって決して害を受けず、それどころか逆に多くの異邦人、諸国の民に影響を与え、福音を語り、彼らを主に立ち返させます。そして「天を見上げなさい…このようになる」と言われたようにこの諸国の民は天に上げられ、その数は「だれも数えきれないほどの大勢の群衆」であると預言されています（黙 7:9）。そしてこの群衆は天において子羊の血によってきよめられた白い衣を着せられ、ここに「見よ、あなたがたにとって、すべてがきよいものとなります。」と言われたイエシュアの預言的な御言葉が成就するのです。このように創世記の「天を見上げ…星を数えなさい」という御言葉が黙示録の「だれも数えきれないほどの大勢の群衆」にまで結びついて、そこにはイスラエルとそれにつながる異邦人がみな同じ一つの民、聖なる国民、神の所有の民となることが示されている、それが神の「義」ツエダカーに秘められた神の国の奥義です。

4. おろそかにしてはいけない

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:42 だが、わざわいだ、パリサイ人。おまえたちはミント、うん香、あらゆる野菜の十分の一を納めているが、正義と神への愛をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけないが、これこそしなければならぬことだ。

11:43 わざわいだ、パリサイ人。おまえたちは会堂の上席や、広場であいさつされることが好きだ。

11:44 わざわいだ。おまえたちは人目につかない墓のようで、人々は、その上を歩いても気がつかない。」

先のイエシュアの御言葉と同じく、ここで重視しなければならないのは靈的に盲目なユダヤ教のラビたちではなく、尊敬され、崇め奉られている教師たち、牧師たちではなく、あるいは少しばかりの知識を得て高慢になっている自分自身でもありません。それらは「人目につかない墓」で「気がつかない」もの、見なくてよい、気にとめなくてよいものだといエシュアは言っておられるのです。そんなものに目を向け、

目を留めて裁いたり、批判したり、一喜一憂する必要などないと言っておられるのです。それなのになぜ見ようとするのですか。見たいと思うのですか。イエシュアは言われます。必要なこと「おろそかにしてはいけない」もの、それは「十分の一」と「正義と神への愛」であると。このように私たちが重視すべきものがここに三つ挙げられています。一つひとつ見てまいりましょう。

①十分の一（を納める）

これを聖書で初めて行ったのはイスラエルの父祖アブラムです。彼はこのように行いました。

創世記【新改訳 2017】

14:18 また、サレムの王メルキゼデクは、パンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。

14:19 彼はアブラムを祝福して言った。「アブラムに祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より。

14:20 いと高き神に誉れあれ。あなたの敵をあなたの手へ渡された方に。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。

アブラムは「祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より」と言った「サレムの王メルキゼデク」に「十分の一」を与えました。いと高き神の祭司でもあった彼は、やがてエルサレムにおいて王座に着かれるダビデの子すなわちメシアであるイエシュアの「型」でありそのものです。このイエシュアなしには神のご計画は絶対に完成、完了しません。たとえイスラエルの残りの者が起こされ、優れた働きをしても、彼らが国家としてのイスラエルを、その王国を建て上げ、これに敵対する勢力を滅ぼすことなどできません。イスラエルを中心とした世界統一国家、千年王国、メシア王国と呼ばれる「神の国」の成就是神の御子、メシアである主イエシュアによってのみ成し遂げられるのです。そしてこの御方が王の王、主の主として地上再臨されて初めてイスラエルは、アブラムの子孫は「いと高き神、天と地を造られた方」の祝福の中に入るのです。これはまさに決して「おろそかにしてはいけない」事実なのです。

②正義（を行う）

これを意味するミシュパート(מִשְׁפָּט)もまた本来、アブラムに関係する言葉です。

創世記【新改訳 2017】

18:18 アブラムは必ず、強く大いなる国民となり、地のすべての国民は彼によって祝福される。

18:19 わたしがアブラムを選び出したのは、彼がその子どもたちと後の家族に命じて、彼らが主の道を守り、正義と公正を行うようになるためであり、それによって、主がアブラムについて約束したことを彼の上に成就するためだ。」

このように「正義と公正（を行う）」とはアブラムが「必ず、強く大いなる国民となり、地のすべての国民は彼によって祝福される」という世界が実現することを大前提としたもの、あるいは付随したものであり、このアブラムに対する主の約束と「正義（公正）」ミシュパートは常にワンセットであり、切っても切れないもの、同義と言っても過言ではないものなのです。主がいかにこのアブラムという存在にこだ

わっておられるかということ、この事実、この真理を、私たちは決して「おろそかにしてはいけない」軽視してはいけないのです。アブラハムを軽んじる者は主に軽んじられます。

③神への愛

この言葉の初出もまたアブラハムに対して主が語られたものです。

創世記【新改訳 2017】

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」

アブラハムはひとり子イサクを「愛してい」ました。しかしそんな「彼を全焼のささげ物として献げ」たのです。それは愛するひとり子をささげるほどに神を愛したということであり、これはまさに以下の御言葉にある神の愛を反映するものです。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

このように、アブラハムの愛は御子イエシュアの父なる神の愛を見事に表し、これを指し示すものだったのです。つまり、このアブラハムに目をとめるなら、彼を重視するなら、そこに父なる神を、その愛を見出すことができるのです。そしてそれは「御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つ」という神の御心、ご計画の成就を指し示します。これは決して忘れてはならない、「おろそかにしてはいけない」神のご計画の本質となるものです。そしてこの愛のゆえに与えられる「永遠のいのち」とは何か、イエシュアご自身がこう説いておられます。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。

このように、神である主が私たちに与えられておられるものは父なる神と御子イエシュアを「知ること」だけです。今日の箇所と次回に取り上げる箇所は一見すると形式的で聖書から逸脱した教えを説く宗教指導者たちに焦点を当てたものとなっており、ここから多くの批判的なメッセージが生まれ、教会がユダヤ人を迫害し、さらには教会が教会を、ある聖書解釈が他の聖書解釈を批判し、分裂と分派を生む結果を今日にもたらしています。このように、悲しいかな私も今、こうやって批判している人を、同じように私も批判しているのです。つまり私は御国を見たいと願っていても、実際には自分が、また他の人が御国を見ているかどうかを見ているのです。これは本当に「わざわざいだ…」というべきこと、悲しい、苦しいです…主イエシュアよ、来てください…。どうか主が私に、私たちに「永遠のいのち」を、主を知ることだけに目をとめさせ、求めさせてくださいますように、御国が来ますように。